



光通寺



無量光寺

古文書から見えた

私部城

～語り継がれる歴史～

問い合わせ
社会教育課文化財係(TEL 893-8111)

VOL. 11

私部城周辺寺院に残る記録

私部城跡がある私部5丁目には、光通寺・無量光寺・想善寺といったお寺が立ち並んでいます。これらのお寺にも私部城や安見右近に関する記録が残っています。

光通寺は臨済宗のお寺で、寛文4年(1664)の棟札には「信長公の時代、安見右近は道義のない者であり、光通寺の壁を破り仏閣は地に墮ちた」とあります。詳細は不明ながら、おそらく私部城築城の際に土地境界の話で壁を破ったのだと考えられています。ただし、「仏閣は地に墮ちた」と書いているものの、光通寺自体は右近の死後も朝廷へお茶を献上する等、健在でありました。

無量光寺は浄土真宗のお寺で、享保15年(1730)に作られた鐘には、寺の由緒が記されています。そこには「安見右近は小城を築き、大坂の役には信長に従軍し、私部に帰還すると覚心(当時の無量光寺住職)の行為にたいして怒り、殺そうとした」とあります。

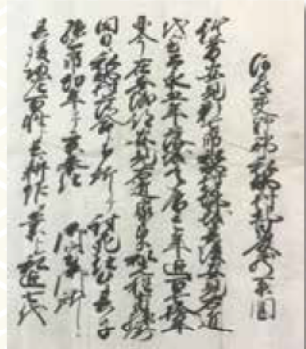
一般的に大坂の役とは信長の死後に起きた、豊臣方と徳川方での合戦ですが、鐘に記された大坂の役とは信長と大坂本願寺の争いのことだと考えられています。信長配下の右近と大坂本願寺と同じ宗派の無量光寺が対立していたための出来事だと思われる。戦国時代に活躍した安見右近ですが、近隣の寺からはかなり嫌われていたことが、これらの記録から伺えます。

北田家文書

江戸時代に旗本畠山氏の代官を務めた北田家は、今もその屋敷が残り国重要文化財に指定されています。

そこに残される系図は、「交野城主安見右近家臣好忠」という人物から始まっており、北田家は昔、安見氏の家臣と伝えられていることが分かります。また、由緒書に「往昔安見新七郎私部村築城其後安見右近 代至大永五年落城年暦今年迄百七拾年」と記されています。

築城の年や新七郎が築城した等、事実と異なる記載もあるのですが、注目すべきところは「室町殿日記」等の交野の外部で作られた文書には「安見直政」という実在しない人物が記載されているのに対し、「右近」「新七郎」といった実在の人物が記されていることです。遠くの地に偽文書や物語で伝わったものとは違う、地元ならではの伝承に基づくものなのだと思います。



系図の由緒書(北田家文書)

地名に伝わるロマン

宝暦12年(1762)に作られた北田家に伝わる「私部村田畑絵図帳」には、「城」や「古城」といった小字や、「城本丸池のはた」といった私部城を連想させる言葉が記されています。

また、昭和初期の郷土史家、平尾兵吾が記した「北河内郡史蹟史話」によると、「天守台」という地名も伝えられたとされています。今のところ古文書等に天守閣があったという記載は確認できていませんが、もしかすると私たちが思っている以上に立派な城だったのかもしれない。



私部村田畑絵図帳

コラム

